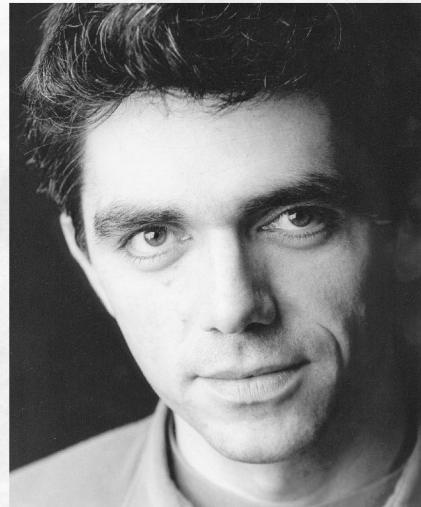


ローラン・ペリ (演出) Laurent Pelly, Stage Director



フランス生まれ。同国で最も人気のある演出家の一人として、演劇およびオペラで活躍しており、近年では、R.シュトラウス等を含む、より重厚な楽劇の演出家として人気が高まっている。また衣装のデザインも担当し、インスピレーションに富んだ彼の衣装からは、劇中人物の解釈をうかがい知ることができる。

ペリは、演劇界において輝かしいキャリアを積んできた。中でも特筆すべきは、2007年にトゥールーズ国立劇場の監督に任命されたことである。それ以前の1997年から2007年までは、グルノーブルのアルプス国立演劇センターの監督を務めていた。

彼の演出で大絶賛を博したオペラとしては、ドニゼッティ《連隊の娘》がある。これは英國ロイヤル・オペラ、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン・オペラで上演され、現在もリバイバル公演が世界中で頻繁に行われている。2006年には、同じく《愛の妙薬》も演出し、パリ・オペラ座、英國ロイヤル・オペラで大好評を博した。このほか担当したオペラは、アン・デア・ウィーン劇場の《ペレアスとメリサンド》、グラインドボーン音楽祭の《ヘンゼルとグレーテル》、サイトウ・キネン・フェスティバル、およびフィレンツェ五月音楽祭の《利口な女狐の物語》、英國ロイヤル・オペラ、メトロポリタン・オペラ、ミラノ・スカラ座他の《マノン》をはじめ多数にのぼり、数々のオペレッタでも大成功を収めている。また、サンタフェ・オペラでも定期的に演出を担当し、《椿姫》(2009年)等を手がけている。

ヴィットリオ・ボレッリ (演出) Vittorio Borrelli, Stage Director

《椿姫》演出、衣装



1959年芸術一家に生まれる。すでに14歳で、改築されたばかりのトリノ王立歌劇場にエキストラとして出演。同劇場の舞台監督であった父の影響で、幼少よりバレエ、演劇、舞台美術そして演出に関心を持つ。

22歳でトリノ王立歌劇場に舞台技術者として入り、何シーズンかを過ごした後、演出助手としてアレーナ・ディ・ヴェローナでも経験を積む。この時期、シルヴァーノ・ブッソッティ、ジュリアーノ・モンタルド、マウロ・ボロニーニ、フィリッポ・クリヴェッリらに師事。師の一人であったクリヴェッリは、1985年ベルガモのドニゼッティ・フェスティバルにおける《当惑した家庭教師》の再演を彼に一任し、1987年にはバーリの劇場で、グリシャ・アサガーロフ演出による《トゥーランドット》を再演した。

1991年、再びトリノ王立歌劇場に舞台監督および演出助手として招かれ、アルフレード・アリアス、ジョナサン・ミラー、アルベルト・ファッセーニ、ジュゼッペ・パトローニ・グリッフィ、エルマンノ・オルミ、ルカ・ロンコーニ、エットレ・スコーラ、ロバート・カーセン、ウゴ・デ・アナなど多数の演出家と共に仕事をする。

1994年には自らも演出家としてデビュー。《愛の妙薬》《ヘンゼルとグレーテル》、フレーニがタチヤーナを演じた《エフゲニー・オネーギン》などの演出を行い、マイケル・ナイマンのオペラ《妻を帽子とまちがえた男》のイタリア初演では、演出・美術ともに手がけている。また最近では、《ラ・ボエーム》のほか、《セビリヤの理髪師》《アルジェのイタリア女》などの上演で成功をおさめている。

ジャナンドレア・ノセダ (音楽監督、指揮) Gianandrea Noseda, Music Director



ミラノ生まれ。同地でピアノ、作曲、指揮を学んだ。2007年よりトリノ王立歌劇場の音楽監督を務め、《修道院での婚礼》《ドン・ジョヴァンニ》《ルサルカ》《ファルスタッフ》《サロメ》《タイス》など、数々の名演を生み出している。2009年5月には、彼が特に好んでいる《スペードの女王》を、トリノの聴衆に披露。加えて、同歌劇場を率いて初のドイツ・ツアーを行い、これを皮切りに、同歌劇場は海外公演を精力的に手がけるようになった。

彼は併せて、マンチェスターのBBCフィルの首席指揮者を務めており、1997年には外国人として初めてマリイン斯基劇場の首席客演指揮者に就任。このほか、スペインのカダケス管の首席指揮者(1998年より)、ロッテルダム・フィルの首席客演指揮者(1999~2003年)、RAI国立響の首席客演指揮者(2003~06年)を歴任し、2000年からはストレーザ音楽祭の芸術監督も務めている。

これまで世界各地の主要オーケストラに客演しており、ニューヨーク・フィル、ボストン響、シカゴ響、モントリオール響、ロンドン響、フランス国立管、ベルリン・ドイツ響、スカラ座フィル、イスラエル・フィルなど、その数は枚挙にいとまがない。また、2006年からは、ヴェルビエ音楽祭に客演指揮者としてレギュラー出演し、日本では、東響、N響を定期的に指揮している。

マリインスキ劇場で指揮した主なオペラとしては、《夢遊病の女》《コジ・ファン・トゥッテ》やブッチーニの《三部作》などが挙げられるが、これらの演目はいずれも、サンクトペテルブルグ初演であった。さらには、メトロポリタン・オペラとも密接な関係を築いており、2002年《戦争と平和》でデビュー後も、《運命の力》《仮面舞踏会》、《イル・トロヴァトーレ》、そして今年は《椿姫》を指揮し、2011年6月にはジェイムズ・レヴァインと共に、メトロポリタン・オペラの日本公演に参加する予定である。

ロベルト・ガッビアーニ (合唱指揮) Roberto Gabbiani, Chorus Master



1947年イタリア・プラト生まれ。フィレンツェのケルビーニ音楽院に学び、ピアノと作曲で学位を取得。1974年ムーティからフィレンツェ五月音楽祭の合唱指揮を任せられたのを皮切りに、これまでアバド、ゲルギエフ、ジュリーニ、クライバー、マゼール、メータ、小澤征爾、プレートル、ショルティ他多くの著名指揮者と仕事をしている。

1990~2002年、ムーティの要請によりミラノ・スカラ座の合唱指揮者を務め、2001~06年にはサンタチエチアーラ国立アカデミーの合唱指揮者に就任。最近では、「東京のオペラの森」でムーティが指揮する作品の合唱指揮も担当している。

2008年7月、トリノ王立歌劇場の合唱指揮者に就任。

クラウディオ・フェノグリオ (児童合唱指揮) Claudio Fenoglio, Associate Chorus Master

1976年生まれ。ピアノ、合唱、指揮、作曲を学ぶ。パレルモのマッシモ劇場で合唱指揮者のアシスタントを務めた後、トリノ王立歌劇場で活動を開始。2007/08年シーズンの子ども向けオペラ《アンナとチェネレントラ》で児童合唱指揮の責任者を務め、2007年からは、《トリスタンとイゾルデ》《エドガール》《ラ・ボエーム》等の合唱指揮を担当。トリノ王立歌劇場の声楽アンサンブルのピアニスト、指揮者も務めている。